

目的 「七十五日」菓子屋編、飲食編は天明七年（1787）に三省舎より刊行されたもので、菓子屋編には菓子店名および菓子名、飲食編には飲食に関わる店名および品名が書かれている。そこで、その内容を分析することによって、江戸中期の食生活の様相を探ることを目的とする。

方法 「七十五日」菓子屋編、飲食編のそれぞれについて解説し、菓子屋編、飲食編についてその店数および菓子名数を地域別、種類別に分類しその特徴を把握し、また菓子名についてはその前後に出版されている名物記等との比較を試みた。飲食編についても同様に行った。

結果および考察 菓子屋編の菓子店は 217店があげられている。地域別に分類した結果、神田周辺が圧倒的に多く、全体の28.8%を占めていた。菓子数は 364種があり、うち煎餅類がもっとも多く 164（45.1%）で、次いで餅菓子の54（14.8%）、干菓子の22（6.0%）、饅頭・団子の22（6.0%）の順で、かすていらは 8回、最中の月も 8回みられる。最中の月は現在に伝わる最中の前身と考えられていて、初見されるのは吉原大全（1768）で、「七十五日」に 8回も出現していることは急速に流行した菓子のひとつと推定される。金平糖は 2回、飴菓子は 9回と少ない。煎餅類の中では、山椒煎餅が 9回、薄雪煎餅が 8回、はつれ煎餅が 8回、当時流行していたと思われるかるやきは 8回、八つ橋煎餅は 4回みられる。飲食編の飲食店は 175店、全品数は 508種があげられている。飲食店の地域分布は神田、日本橋周辺が多い。最も多いのはそば店で、次いで重詰め・料理店等、すし店、などであった。その他お茶店、酒店、漬物店、うなぎ店等、またゆば、卵の店もある。1店には37種類もの品名のみられる店もあった。